國學院大學学術情報リポジトリ

1874年東京における「もう一つの博物館」：歴史資料としての日記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 敏弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000486

【論文】

1874年東京における「もう一つの博物館」
―歴史資料としての日記―
Dr.Rein and the Museum in Tokyo 1874; Diary as the Historical Evidences

吉田　敏弘
YOSHIDA Toshihiro

はじめに

1980年に日本で開催されたIGC（国際地理学会議）のおり、京都では地理思想史部会が開催された。この成果をもとに、京都大学文学部地理学教室は『地理の思想』(1)の出版を企画した。当時同教室の助手であった筆者は、主任教授水津一朗先生から「J.J.ReinとL.Riess」というテーマで小論を執筆するよう指示された。すなわち、明治初期の日本に科学的地理学を伝えた二人のドイツ人研究者の足跡を調査することが課題であったわけだが、Reinに関する限り、二巻の大著“Japan”やPGM（ペーターマン地理学雑誌）、OAG（ドイツ東亜学会誌）などに掲載された日本旅行の記事などの著作は知られていたが、地理学史の関係でReinに言及した日本語文献は乏しく、また限られていた。多くの場合、Bonnで親しく指導を受けられた山崎直方による追想文「ライン先生とライン文庫」(2)を通じて、その業績や人物像が知られていた程度、といって過言ではない(3)。こと日本の地理学界に与えた影響という観点では、Reinが果たした役割はさほど大きなものではなかった、とみなさざるを得なかった。

そこで、同書に掲載した私の小論(4)では、草創期の東京大学文学部における史学地理学講座に焦点を当て、そこにお雇い外国人教師として招聘されたLudwig Riessとその周辺について調査し、いくつかの知見を記した。Leopold von Rankeの下で実証史学を学び、来日後は『台湾諸島史』を上梓した歴史学者Riessだが、史学地理学講座では地理学の講義も担当した。当時の受講生も、それがもっぱら自然地理学的な内容であった、と記憶している程度だった。むしろ人文地理学に関しては、ドイツ留学から帰国した日本人歴史学者、坪井久馬三がFriedrich Ratzelの“Politsche Geographie”に依拠した講義を行っており(5)、これが史学研究者に広く受け入れられたことが明らかとなった。

このように、ReinやRiessについて、日本地理学史に積極的な評価ができなかった筆者だが、その後、夏の登山で訪れた白山麓桑島の里で、たまたまRein祭に遭遇するところとなり、Reinの名がひなびた山村でいまなお語り継がれていること、日本におけるReinの最大の功績が化石発見であったことを改めて知るに及んだ。このイベントがきっかけとなって、今回Reinの日本滞在日記が公刊されることとなったのは、誠に喜ばしい。

Johaness Justus Reinヨハネス・ユストゥス・ライン（1835-1918）は、プロイセン政府の委嘱を受けて1873年末より約二年間日本に滞在し、日本の伝統産業の調査にあたった。この調査

の成果に基づいて帰国後に出版した“Japan”上下二巻[6]は、当時西洋諸国の興味を集めていた日本に関する初めての科学的な研究書として好評を博し、直ちに英訳版も出版された。この業績により、中国研究で著名なリヒトホーフェンの後任として1883年にボン大学地理学研究所の教授に迎えられた。

図1　若きライン博士の肖像
（Archiv Dr. Jürgen Schwalm、註9・BD. 1, 2020より）

ラインの人物や業績に関しては、石川日独協会・石川EU協会などの会長職を歴任され、国際交流に尽力されてきた楠根重和氏（金沢大学名誉教授、ドイツ文学・国際コミュニケーション論）の論考[7]に詳しい。楠根氏は桑島のライン祭を指導され、白山市とドイツとの交流にも貢献された。ドイツ訪問時に、楠根氏はラインの生家のあるラオンハイム市博物館にラインの日記が所蔵されていること、さらにそこには詳細な日本旅行の日記が含まれていることを確認され、当面石川県や白山市に関連する部分を複写し、現地研究者の協力のもとにこれらを解読し、その一部を訳出された[8]。

さらに、楠根氏はこの日本日記の重要性をボン大学の歴史地理学教授であったWinfried Schenk氏と共有し、Schenk氏はボン大学でこの日記を翻刻・出版することを約束し、若い研究者Tobit Nauheim氏を中心に日記の解読と翻刻がすすめられた。大部で難解なマニュスクリプトの日記ではあったが、スキャニング画像のAI処理をも併用して解読がすすめられ、2021、2022年に二巻本の翻刻出版が完成した[9]。日記には、Nauheim、楠根両氏による詳細な注が付されたほか、同書第１巻には、Nauheim氏によるラインの伝記的研究と日本日記の詳細な解題[10]、第２巻にはラインの日本調査について論じた楠根氏によるドイツ語の解説[11]、そして日記の歴史資料としての活用を目指した筆者の英語による小論[12]が収録されている。本稿は、この小論の元となった日本語の草稿に加筆修正を施したものであり、内容的にはほぼ同一とみなして構わない。

この小論執筆時点（2021年12月）で、筆者は未だReinの日記第1巻の前半部分を拾い読みしていたに過ぎないが、ライン来日当時の日本の学問は江戸時代とさほど変わらず、Reinを受け入れる学界はいまだ存在していなかったため、Reinの日本国内における調査活動が日本のアカデミズム地理学の形成に何らかの影響を与えたとは考え難い。日本における交友関係も在日ドイツ人社会を中心としており、その枠から大きく逸脱することはなかったように思われる。

したがって、筆者はこの日記を地理学史ではなく、歴史地理学あるいは地理思想史の資料として活用を図りたいと考えた。異国を旅する個人の旅日記という資料は、完全な一日ごとのタイムオーダーで生起するさまざまな出来事が、ある種の主観をも交えて書き綴られており、記載された出来事や空間的行動の記録は、そのままそれが書かれた時代のHistorical Evidenseとなりうる。そして主観的な記述も、異文化体験によってもたらされる人間の多様な心理的対応を映し出す鏡となる。異国であるが故の誤解や事実認識の混乱なども含まれるので、日記なら

ではの史料批判も重要だが、逆に同国人なら当然のこととして記述されないような事柄についても、異邦人の目には強い印象をもたらすこともあろう。

Reinのばあい、科学的方法を習得した研究者の目を通して見た日本の実情の記録であること、に加えて、産業調査という目的に即して、通常は外国人が通過しない珍しい地域にも足を向けていることもあって、他の西洋人の日本日記にはない興味深い記述や認識が含まれており、その史料的価値は極めて大きいものと評価できるのである。

１．歴史資料としての日記―東京での出来事から

日記には、自身の行動だけでなく、身近で起こったさまざまな出来事が記載される。

Reinは当初プロイセン国公使Max Brandtより永田町の公使館の一室があてがわれていたが、74年１月20日には近隣（永田馬場）に自らの住居を定めた。自らの目と耳で体験したこと、あるいは公使館や東京・横浜在住のドイツ人たちや日々の行動を共にした通訳の三田佶、使用人のテツなどからの伝聞情報を交え、日々東京で起こったさまざまな出来事が書き留められている。ここでは、1874年の上半期におけるReinの東京生活で書き留められた話題をいくつか抽出してみたい。

74年12月31日夜には在東京ドイツ人が集い、日付が変わって新年を祝ったのち、午前1時頃Shinto-Shrine（Dchinsa）で火事、との情報が伝わる。著名な増上寺放火事件であるが、火災の炎はReinの目にも生々しく焼き付いた。

> Um 1h. hieß es: Feuer in Dchinsa!! Man konnte es vor der Tür prächtig sehen. Hohe Flammen, eine Zeitlang durch Kupfer blau gefärbt, schlugen über die niedrigeren und näheren Häusercomplexe, rötheten den Himmel und verstärkten das Mondlicht, das durch einen anfangenden Schneefall geschmückt worden war.
>
> （筆者訳：１時、「ドチンサで火事だ！」玄関を開けると、その光景が目に飛び込んできた。高い炎は、しばらくの間、銅で青く色付けされ、下の家々や近くの家々を飛び越え、空を赤く染め、降り始めた雪で飾られた月明かりを強めた。）

赤々とした炎の中に銅が燃える青い光を見逃さないが、翌１月１日の記述にも、増上寺という名称はみえないが、“einen der berühmtesten Tempel”の火災としている。

火事と並んで地震もまた細大漏らさず記録されたようだ。74年１月５日朝７時30分に次いで、翌１月６日夕刻８時45分にも揺れや地鳴りが記録されている。地震記事はさらに２月15日12時半、３月８日午前３時半、４月26日夕刻、など、体験に基づく記録がある。

74年１月15日の昼食時、前夜に起きた岩倉具視暗殺未遂事件がうわさにのぼり、夕食時にもこれについての話題がでたという。Reinが公使館に仮住まいをしていた時期であるから、政界がらみの情報はいち早く入手できたのである。しかし、住まいが公使館から離れると、こうした政治的事件に対する関心は次第に薄れてゆき、自らの任務や興味の赴くところに集中していったようだ。実際、このあと２月１日には「佐賀の乱」、５月22日には台湾出兵などの重大な事件が起こったにもかかわらず、日記にこうした話題は出てこない。こうしたあたりに、日記に書き留められた情報の偏りがみられ、それを書いた人物の興味や関心のありかが反映され

るのである。

自然災害はReinの関心の対象であった。マスコミュニケーションが未発達な当時、東京以外の地で起きた災害の情報については、後日公表される公式報告の公開を待つほかはなかった。74年７月３日に起こった伊豆・三宅島の噴火災害に関しては、８月21日に足柄県の報告書に基づいて、噴火災害の経過や被害状況、とりわけ海底から新たな陸地が出現したことなどが詳しく書き留められている。

海難事故もまた、外国人として強い関心を持って受け止められた。ウィーン万博の展示品を搭載して横浜に向かっていたフランス貨客船ニール号は、74年３月20日未明に伊豆半島沖で座礁し、沈没するという事故が起こった。事故の詳細は３月24日に県令を経て政府に報告されたが、日記には３月25日に、

> “Hörte, daß das sei Sonntag erwartete franz. Postschiff bei Shimosa untergegangen & nur vier Menschen gerettet seien.”
> （筆者訳：日曜日から到着が予定されていたフランスの郵便船がShimosa―下田の間違いーで沈没したと聞いた。）

と第一報が届き、次いで翌３月26日には、

> “Über den Verlust des Nil an der Südspitze von Idzu in der Nacht vom 20/21 ist leider kein Zweifel mehr. Von 146 Menschen an Bord sollen nur 4 gerettet sein.”
> （筆者訳；残念なことに、20/21日夜、伊豆の南端でニール号が沈没したことについて、もはや疑う余地はない。146人の乗組員のうち、助かったのはたった４人と言われている。）

と、詳細な情報が記録された。この事故の新聞報道は『東京日日新聞』３月28日付紙面というから(13)、Reinには日本政府ないしフランス公館、あるいは保険業者が集中する横浜経由で情報が伝わったものと推測される。

このように、個々の記述の情報源が明らかでないケースが多いことは難点だが、伝聞情報もまた歴史史料としての価値をもち、情報が社会にどのように拡散され、どのように受容されたかを考察する素材となりうるのである。

２．Shiba　Museum?

ラインが来日したころ、日本もまた「博覧会の時代」を迎えていた。ここでは、日記に登場するMuseumについて、若干の考証を試みたい。

1859年の横浜開港により、欧米諸国との国交が本格的に進展する中で、1862年にロンドン万国博覧会が、1865年にはパリ万国博覧会が開催され、日本の西欧デビューの重要な契機となった。西欧にとって未知に等しかった日本の文物が展示される(14)とともに、そこを訪れた日本人のいでたちやファッション、そしてその行動規範などに注目が集まり、日本ブーム（ジャポニズム）をひき起した。他方、そこを訪れた日本人は、西欧諸国の産業化を推進する科学技術力に驚嘆し、それを学ぶ機会として万国博覧会の意義を理解した。

1871年２月、オーストリア国代理公使より明治政府に1873年開催のウィーン万博への参加要請が届けられ、翌年１月には正式に参加が表明された。しかし、万国博覧会の趣旨や目的を理

解する者は少なかった。もちろん、日本でも18世紀以来、本草学を主体とする「薬品会」や、その流れを汲んで商品価値を競う「物産会」などの小規模な展示会が開催されていた。またこれと並行して、珍奇な動植物や鉱物岩石などを収集する博物学的な関心も芽生えつつあった。こうした当時の認識に基づき、全国すべての府県に出展品の提供が呼びかけられ、古物・骨董品の類から国内の工芸・特産、動植物や鉱物などの自然標本など、多岐にわたる品が収集された。これらの出展候補品を一堂に集め、1872年３月より東京の湯島聖堂大成殿を会場として本邦初の「博覧会」(15)が開催され、大好評を博した。

これを契機として、博物館組織の必要性が認識されるところとなり、ウィーン万博に先駆けて、1873年３月にかつての江戸城外濠内の一角、内山下町（現在の帝国ホテル周辺）に博物館が移転され、以後約10年間にわたってこの地で展観業務が行われた。したがって、ラインの滞在中における博物館といえば、この内山下町博物館以外には存在しなかったことになる。

ラインの日記では、1874年１月31日の記事に、

> Hakurankai ist ein sehr sehenswertes Institut ein naturhistorisch-technisches und ethnogr. Museum, das an allen Feiertagen gegen ein kleines Entré geöffnet und nicht weit von Nagata Baba ist.

また同年２月６日にも、

> War heute in der Ausstellung, Haku-ran~kuwai,（spr. Hakurangkai）d.h. einer Ausstellung（Kwai）in der viele interessante Sachen zu sehen und zu lernen sind.

とあり、ラインは、これを自然史・技術・民族学を包括する総合博物館と捉えており、価値ある展示であると評価していた。なお、ラインは全ての休日に開館されていると記すが、明治初年の休日は１と６のつく日であり、記事が１月31日、２月６日であることと符合している(16)。

しかし、ラインの日記には、当時の東京にもう一つの博物館が記載されている。すなわち「芝のMuseum」である。芝とは東京の旧市街の南部地域にあたり、徳川将軍家の菩提寺として知られる増上寺の境内周辺を指す。しかし、明治以後、この地に博物館が存在したことは、日本語文献では管見の限り知られていない。したがって、それゆえに、それが政府機関の手になるものではないと推測できる。

今、日記から「Museum」に関連する記載を抽出すると、表１のようになる。件の其の博物館は74年２月15日に開館セレモニーが行われているのだが、その式典が夕刻８時半に開始されていること、同日、プロイセン公使Brandtと秘書のKemmpermanが記念講演を行っていること、などから判断して、このMuseumがBrandtをはじめとする在日ドイツ人たちによって準備されたものと推測できるのだ。ラインも１月15日に“Die Sammlungen machen schöne Fortschritte”と、展示品の収集がはかどっていることを記し、２月４日には、“mit ihm Ausstellung in Shiba”とあり、展示作業に従事したことをうかがわせる。そして２月15日の落成の日を迎えるのだが、その後、数か月を経た５月６日、ラインはここに伊藤圭介を案内した。伊藤圭介は名古屋出身の著名な本草学者で、長崎でH.v.シーボルトの指導も受けた門弟で、Carl Peter Thunbergの“Flora Japonica”の日本語訳で知られる。名古屋では嘗百社という本草学研究会に所属し、自宅で尾張国初の博物会を催したという人物で、やはり当時の日本

表１　ライン日本滞在日記の明治6年～7年９月に見える博物館・博覧会関係記載（太字は筆者）

日付	日記の記載	所在地	日本語訳
26/12/1873	Waren in Chiva, einem Stadtteil von Yedo, wo großer Tempel und Begräbnisstätte der Taikune. Einen Tempel in der Nähe hat Hr. v. Brandt für **die Sammlungen der ostasiatischen Gesellschaft** gemietet.	Chiba（Shiba）	**チバ（シバの誤り）**は江戸の一地区で、大きな寺院と将軍の墓地がある。 ブラント氏は、**ドイツ東亜協会のコレクション**のために近くの寺を借りている。
3/1/1874	Heute, Samstag, fuhren wir nach dem **Museum in Shiba**, packte dann meine 12 Flaschen ｢ー｣ aus, wovon 2 Fl. zerbrochen und ausgelaufen waren, gab mehrere Flaschen zum Frühstück zu dem die Dr. Müller, Ritter, Cochius eingeladen waren.	Shiba	今日土曜日は、**芝にある博物館**まで車で行き、それから私のマルコブルンナー12本（うち2本は割れて漏れていた）の梱包を解き、ミュラー博士、リッター氏、コキウス氏を招いての朝食に数本差し上げた。
15/1/1874	Auf der Südwestseite ist ein Friedhof. Die Aussicht reicht über einen ansehnlichen Theil der Stadt, fand beide Aneroide auf gleichem Stande wie in Nagata Baba, ging dann hinunter nach dem **Museum, traf 4 Ainos, Ackerbauschüler in Yedo**, deren ältester 25 Jahre alt war. – Die **Sammlungen** machen schöne Fortschritte.	Shiba	南西側には墓地がある。 町のかなりの部分が見渡せるが、２本のアネロイド気圧計は永田馬場と同じ値を示した。それから**博物館**に下りて、**江戸の農学生のアイヌ4人に会った**が、最年長は25歳だった。コレクションは順調に進んでいる。
31/1/1874	**Hakurankai ist ein sehr sehenswertes Institut ein naturhistorisch-technisches und ethnogr. Museum**, das an allen Feiertagen gegen ein kleines Entré geöffnet und nicht weit von Nagata Baba ist.	yamashita mon	**博覧会は自然史・技術・民族学の博物館として、とても興味深い研究所だ。** 休日はいつでも開館している。 永田馬場からも遠くない。
4/2/1874	Besuchte Reh und mit ihm **Ausstellung in Shiba**. Abends zum Essen bei Herrn von Brandt, wo ich Herrn Walsh kennenlernte und wo auch der Vorstand der Ostasiatischen Gesellschaft sich eingefunden hatte.	Shiba	彼と一緒に**芝の展示**を見学した。夜はフォン・ブラント氏の家で夕食。ウォルシュ氏にも会ったし、東亜協会の役員も集まっていた。
6/2/1874	.War heute in **der Ausstellung, Haku-ran-kuwai, (spr. Hakurangkai)** d.h. einer Ausstellung (Kwai) in der viele interessante Sachen zu sehen und zu lernen sind.	yamashita mon	今日は**博覧会という展覧会**に行った。そこには見るべきもの、学ぶべきものがたくさんある。
8/2/1874	Machte nachmittags Spaziergang nach **Shiba, traf in Sammlung Winkler**, wollte mit ihm 2 schwarze Bären und einen fliegenden Hund sehen, wurde durch betrunkenen Soldaten bedroht und zur Rückkehr veranlasst.	Shiba	午後、芝へ散歩に出かけた。**コレクションでウィンクラーに会い**、彼と一緒に2頭のツキノワグマと空飛ぶ犬を見たかったが、酔っ払った兵士に脅されて帰らされた。
15/2/1874	**Abends 8 ½ Einweihung des Museums in Shiba und Vorträge von Hr. v. Brandt & Kempermann.**	Shiba	夕方8時半、芝で博物館の開館式が行われ、ブラント氏とケンペルマン氏による講演が行われた。
25/2/1874	Dann kam T. Lenz von Tokio, blieb zum Frühstück, besuchte dann mit mir **Herrn v. Brandt in Shiba**, worauf ich ihn zur Bahn begleitete. Erhielt von Reh für 50 doll. Rio 51. 10sen. aus Yokohama.	Shiba	その後、T.レンツが東京から到着し、朝食のために滞在した後、芝で私と一緒にブラント氏を訪ね、その後、鉄道まで同行した。レーから50ドルを受け取る。横浜からRio51.10sen.
11/4/1874	In Shiba war in Folge dessen eine schwachbesuchte, aber interessante Sitzung der d. O. G. worin mich namentlich Dr. Ritters Mittheilungen über den Tofu (Bohnenkäse) und einiges andere lebhaft interessierte.-	Shiba	芝ではd.O.G.の会合があり、出席者は少なかったが興味深いものだった。リッター博士の豆腐（豆チーズ）についての報告や他のいくつかのことに特に興味を持った。
6/5/1874	**Mit Ito Keiske in Shiba in der Sammlung, Nachmittags Besuch von Reh.**	Shiba	**伊藤圭介と芝に行き、午後、鹿を見学した。**
2/6/1874	Ging mit Sanda nach Higashi Honganji, gew. Higashi Gobo, einem mächtigen Buddhistentempel im Osten (higashi) der Stadt ins Hakuran kai. Die Ausstellung ist hier und theilweise in einem zweiten Tempel, schlecht geordnet, aber in vieler Hinsicht reich und sehenswerth.	nagoya	三田と一緒に東本願寺（東御坊）へ行った、東本願寺は町の東に位置する有力仏教寺院である。展覧会はここと、もうひとつのお寺の一部で行われている、整理は不十分だが、多くの点で充実しており、一見の価値がある。
22/8/1874	Schickte Briefe No. 12 an Elise und einen Bogen an v. Fritsch, war mit v. Brandt in Shiba und ordnete **Lacksammlung des Museums**. I	Shiba	エリーゼに12番目の手紙を送り、V.フリッチュに1枚送った。V.ブラントと一緒に芝に滞在し、博物館の**漆コレクション**を整理した。 I
14/9/1874	Mache für Herrn v. Brandt (**ShibaMuseum**), **Sammlung von Mineralien aus Koshiu** zurecht und schicke sie ihm gegen Abend.	Shiba	ブラント氏（**芝博物館**）のために**甲州の鉱物のコレクション**を準備し、夕方ブラント氏に送った。
20/9/1874	In einem Seitengebäude ein wahres **Museum** von Gewändern, Masken, Waffen etc., wie sie bei religiösen Spielen so beliebt sind. 16 gleichgroße und dicke Glocken, geben die laufenden Töne sehr scharf und schön.	Nikko	横の建物には、宗教的なゲームによく使われる衣、仮面、武器などの博物館がある。16個の同じ大きさで厚い鐘が、非常にシャープで美しい音色を響かせる。

で「博覧会の時代」をリードする存在であった。

ラインは74年３月19日にはじめて伊藤圭介にプローチし、４月28日には自宅のディナーに招待し、同学の親交を深めている。この一週間のち、芝のMuseumに招待となったわけだが、伊藤圭介の日記では、この日のことを次のように記す。

５月６日　日曜　（略）ラインを訪ね同道し、芝の○○院へ行く。博覧会の陳列品を一見する。Mr.Se.（シーボルト？）の著述本も一見する。公使とも会った。産物志の制作を依頼された。できたら差し上げると申し置いた。（以下略）

非常に示唆的な記述であり、芝の一寺院（圭介はその名を書き漏らしている）を会場として博覧会が開催されていること、またそこが書庫の機能も備えていたことがわかる。ここで公使（Brandt）と面会しているので、このMuseumがBrandtが頻繁に訪れる場所であったことも推測できる。ラインの日記では74年９月14日に

> Mache für Herrn v. Brandt（Shiba Museum）, Sammlung von Mineralien aus Koshiu zurecht und schicke sie ihm gegen Abend.

とあって、BrandtとShiba Museumとの不可分の関係を暗示している。

大変まわりくどい記述となったことを恐れるが、結論は明瞭だ。この芝のMuseumは公使Brandtを中心とする在東京ドイツ人たちの手で準備された展示であり、この事実は、すでにラインの日記73年12月26日に、

> Waren in Chiva, einem Stadtteil von Yedo, wo großer Tempel und Begräbnisstätte der Taikune. Einen Tempel in der Nähe hat Hr. v. Brandt für die Sammlungen der ostasiatischen Gesellschaft gemietet.

と記され、それがOAGのコレクションであったことを記していたのである。この記事は地名が“Chiva”となっており、“Shiba”の検索から漏れてしまうために、気づきにくかったのだが、記載内容からShibaのMuseunのことであることは明らかだ。それでは、残念ながら伊藤圭介がその名を書き漏らした増上寺の近くの寺院とはいったいどこなのか？

幕末期、Shiba周辺には　外国使節の滞在用、あるいは公使館用に幕府が準備した寺院があった。プロイセンの最初の領事館は横浜に置かれていたが、その後幕府は使節団宿所として、芝の広学院（1865年４月３日）を指定し、次いで麻布（芝の北西側の地区）の春桃院（1866年３月～）に移した。その後、1872年に公使館は麹町区永田町に移り、ラインもまた来日直後はここの一室に居住したのだった。したがって、Shibaならば、広学院Koh-Gaku-inのみが、一時的にせよBrandtらが利用していた施設ということになる。しかし、広学院は芝の南、むしろ高輪に属する位置で、増上寺にも近接しないので、条件に合わない。

答えは、OAGの初期の歴史を記したChristian W. Spang氏の記述[17]に記載されていた。長文ながら引用したい。

> Da die OAG anfangs die Absicht hatte, neben einer Bibliothek auch ein eigenes Museum einzurichten, wurde im Sommer 1873 mit der Suche nach einer geeigneten Unterkunft begonnen. Mit Unterstützung der Meiji-Regierung gelang es Ende des Jahres, Räume im Tenkô-in,3 einem Nebentempel des Zôjô-ji, unweit des Shiba Kôen

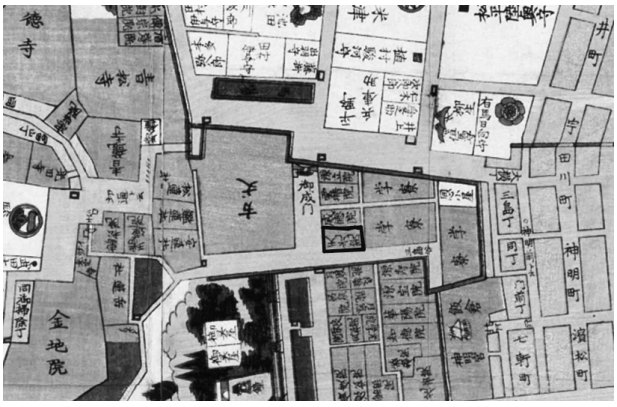

図2　江戸切絵図に見える天光院（太枠筆者）

図3　迅速測図原図に見える北海道開拓使仮博物館（太枠筆者）

anzumieten. Angesichts der unsicheren Lage vieler Tempel und Schreine nach der Meiji-Restauration 1868, kamen den Verant-wortlichen des Tenkô-in diese “deutschen” Mietzahlungen sicherlich gelegen. Da die OAG-Veranstaltungen in den ersten Jahrzehnten abwechselnd in Tôkyô und Yokohama abgehalten wurden, fand die erste Zusammenkunft im Tenko-in dennoch erst im Februar 1874 statt, so daß genug Zeit blieb, die inzwischen zusammengetragenen Ausstellungsstücke aufzubauen und die Bücher einzusortieren.

（筆者訳：OAGは当初、図書館と博物館を併設する予定であったため、1873年の夏から適当な宿を探し始めた。明治政府の支援もあり、年末には芝公園からほど近い増上寺の子院である天光院の一室を借りることができた。1868年の明治維新後、多くの寺社が不安定な状況に置かれていたことを考えれば、このドイツ人の賃借料が重宝されたのは確かである。最初の数十年間は、OAGの行事は東京と横浜で交互に開催されていたため、天光院で最初の会合が開かれたのは1874年２月のことだった。）

記述はラインの日記とよく符合し、両者の記述の正確さを保証するものと言える。73年12月26日の記述は、73年末に天光院の部屋を借り受けたその日のことであろうし、74年２月15日の日記は、ここで開催されたOAGの最初の会合を記述したものと解される。

Spang氏によると、OAGによる博物館建設構想は、当初日本側の博物館の未熟に対して範を示すためのプロジェクトであったが、その維持には費用が嵩み、OAGの年間収入の半分以上もかかったという。その後内山下町、のち上野公園内に本格的な博物館が建設されるに及び、OAGはその役割を終えてプロジェクトは解散、収集品はドイツ本国に送られたようだ(18)。

Spang氏の記述は、OAGのMuseumプロジェクトが実現に至らず中止されたようにも受け取れるが、Reinの日記は、曲がりなりにもMuseumは開館され、展示を公開するに至っていたことが明らかとなる。この廃止に至る過程は、75年にBrandが清国公使として離日したことと大いに関わっているように思われる。明治政府の仲介で天光院という最高の場所の借上げが実現したこと自体、この構想はやはりBrandの政治力が大きく関与していたことは否定できまい。

3．Aino in Shiba?

ShibaのMuseumに関連して、今一つの問題を検討しておきたい。表中、１月15日の記事に、“ging dann hinunter nach dem Museum, traf 4 Ainos, Ackerbauschüler in Yedo, deren ältester 25 Jahre alt war.”とあって、愛宕山の丘陵を南に進んで博物館に降り立ったReinは、ここで４人のアイヌの農学生に出会ったと記述する。引用文の後、彼らの外見の印象が酷評されているのだが、それはともかく、なぜここでアイヌに出会ったのか、という点に興味がわく。

かつて、天光院（Museum）のあった御成門付近、増上寺の方丈跡地には北海道開拓使東京出張所がおかれていた(19)。この出張所は、北海道開拓使の事業に関して東京から指示を発する執政機関であり、もと小網町稲荷堀にあったが、1871年８月にこの芝の地に移転した。翌年には開拓使仮学校（札幌農学校の前身）が併設され、さらに、アイヌの同化教育を行う北海道土人教育所も設置された。この土人教育所は、アイヌの青年を東京に連れ出し、言語や農業を教化するものであり、アイヌ人らは当初開拓使第三官園（下渋谷）に居住したのち、増上寺の子院、清光院を開拓使が借り上げて、ここを居住所としたようだ(20)。なお、清光院は出張所からはやや離れて、増上寺境内の南に位置する寺院である。

土人教育所については、アイヌ教化の方針が明確でなく、場当たり的な性格が強かったといわれ、東京と教育所の生活になじめず、30名中25名のアイヌ人が帰郷を希望し、1874年７月に教育所は事実上の閉鎖となった。残留したアイヌは仮学校に編入となったが、仮学校自体も75年７月に札幌に移転した(21)。したがって、教育所にアイヌ青年が所属していたのはわずか３年あまりであったが、確かにRein滞在当時、OAGのMuseumの近辺にはアイヌの青年らが行き交っていたのである。

なお、1881年測量発行になる迅速測量原図（図３）によると、この増上寺方丈の跡地には「仮博物館　開拓使　出張所」の名称がみえる。このもうひとつの「仮博物館」は、開拓使管轄の施設で、仮学校が移転してのち75年６月に設置された北海道物産縦覧所が76年２月に改称されたものである。したがってRein滞在中には存在していない。こののち、77年には札幌に仮博物場、79年には函館に仮博物場が開場する。この北海道内の２つの博物場の開場を待って、81年５月には開拓使東京出張所の廃止にともない、東京仮博物場も廃止となり、所蔵品は北海道の博物場や札幌農学校などに移されたという。

日本ではほとんど知られていなかったのだが、短期的ではあれ、この芝の地には確かに博物館、博物場が存在していた。Museumにせよ、Ainoにせよ、芝にわずか数年間存在した歴史的事実を、Reinの日記は描き出し、よみがえらせてくれたのである。北の上野（寛永寺）とならび、南の芝（増上寺）の広大な寺院境内もまた、明治以降、近代的な都市公園として再生され、博物館という新しい時代の流行を取りこんだ場になろうとしていたのである。

4．「博覧会の時代」とRein－むすびに代えて

こうした日本における博物館の黎明期にあって、東京の動きを先取りするように、地方でも博覧会が開催されていた(22)。京都では1871年に第一回京都博覧会を開催し、博覧会ブームの先駆けとなった。以後も名古屋や金沢、和歌山といったかつての大藩の城下町のみでなく、県

や郡を単位として小規模に開催される博覧会など、様々な形態での開催が相次いだのである。とりわけ、Reinが旅した1874年は、前年のウィーン万博の余波を受けて、地方博覧会が開花した年だった。

Reinの来日自体、産業や物産の調査を主目的にしていたので、こうした博覧会は彼の情報収集にとって絶好のチャンスであり、機会があれば積極的に足を向け、時には珍しい欧州の知識人として、請われるままにコメントを述べることもあった。

1874年の６月２日、最初の旅であった東京から京都へ向かう道中で、ラインは名古屋の博覧会に立ち寄っている。前日は休日とあって、大変な賑わいであった会場だが、この日はゆっくりと観覧できたようで、Reinはその展示物の豊富さに感嘆し、称賛している。実際、日記には延々と印象に残った展示品のリストが書き連ねられており、興味の高さがうかがわれる。昼には県令を訪問し、担当役人が案内につき、午後も観覧、翌日は瀬戸へのエクスカーションののち、夕刻にも博覧会に赴き、役人との質疑や意見交換が行われた模様だ。『愛知県下博覧会物品録』[(23)]には、

「193　15表　同　カルトパールト　矢場裏　高木一實　墺国ボヘミア温泉ノ底ヨリ出ル品ナリト独乙人ライン氏鑑定セリ此石焼テ石灰トナスヘシ」

「194 15 表　カラナート石　三河国額田郡真福寺地内産　三河國　物産會社　ライント氏曰コノ石大ナルモノハ琢磨シテユビワノカザリ　トナスヘシト云」

とあって、物品リストにまでReinのコメントが記録されていたのである[(24)]。

こうした博覧会は、数年後には全国的な勧業博覧会に結実し、各地の名産品に光が当てられ、全国的なブランドの形成が進められた。さらには世界市場へ参入するための商品開発も活発化していた。

名古屋から関西を旅したのち、６月22日、訪れた岐阜で、製茶会社の依頼を受けて、同社試作の紅茶についてアドバイスを求められたReinは、「干し草」の味がする、と評して、中国よりサンプルを取り寄せることを約束したことが記録されている。岐阜で紅茶の製造とは意外だが、ちょうどこの年、内務省勧業寮より、外国輸出用の紅茶製造のため、紅茶製法書を製茶業者へ廻達する旨が各府県に布達されている。そうした布達に直ちに応える底力を、地方の業者も持ち合わせていたのである。

国際市場への参入という目標に向けて、国内各地で殖産興業の試みが展開する中で、全国の交通不便の地にまで足を運んだReinは、訪れた各地で、よきアドバイザーとして民衆と交流をもった。日記はそうした草の根の国際交流の記録としても、興味深い素材を提供してくれるに違いない。

註

（１）　京都大学文学部地理学教室編　(1982)『地理の思想』地人書房

（２）　山崎直方　(1925)「ライン博士とライン文庫」『地理学評論』１－６

（３）　西川　治　(1985)「ボン大学における日本地理研究」石田　寛 編『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院

（４） 吉田敏弘 （1982）「史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜」『地理の思想』地人書房

（５） 坪井久馬三 （刊年不明）『歴史地理学（講義録)』早稲田大学出版部

（６） REIN, Johannes Justus, (1881) *Japan nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung dargestellt. Bd. 1. Natur und Volk des Mikadoreiches*, Leipzig.

REIN, Johannes Justus, (1886) *Japan nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung dargestellt. Bd. 2. Land- und Forstwirthschaft, Industrie und Handel*, Leipzig.

（７） 楠根重和 （2001）「ライン博士（１）ライン博士の日本観と足跡」『金沢法学』43－3

楠根重和 （2002）「ライン博士その二（ライン博士と日本)」『金沢法学』44－2

（８） 楠根重和 （2018）「ヨハネス・ユストゥス・ラインの日記から―福井県から石川県に入った部分の翻訳」『第36回ライン祭（ヨハネス･ユストゥス･ライン博士没後100周年)』ライン博士顕彰会

（９） Tobit Nauheim, Shigekazu Kusune, Winfried Schenk編（2020・2021）*JAPAN 1873-1875: DIE TAGEBÜCHER DES BONNER GEOGRAPHIEPROFESSORS JOHANNES JUSTUS REIN*, BAND 1/2, “COLLOQUIUM GEOGRAPHICUM” Band 37/38 , Bonn

（10） Tobit Nauheim（2020）Einleitung（前掲註９，Bd.1）

（11） Shigekazu Kusune（2021）Die Japanreise Johannes Justus Reins. Ein gewaltiges Unternehmen eines deutschen Geographen（前掲註９，Bd.2）

（12） Toshihiro Yoshida（2021）Dr. Rein and another Museum in Tokyo, 1874. Diary as the Historical Evidence（前掲註9，Bd.2）

（13） 富田 仁 （1977）「ニール号破船:西陣織工の死」『文藝論叢（文教大学女子短期大学部文芸科)』14号

（14） 1862年ロンドン万博では、イギリスの初代駐日公使オールコックの個人的なコレクションが展示され、当時訪欧していた江戸幕府の文久使節団（福沢諭吉を含む）がこれを見学した。また、1867年パリ万博には、全国を代表して江戸幕府が出展したほか薩摩藩、佐賀藩もそれぞれ独自に参加出展し、その担当者たちが実地で博覧会業務を体験した。

（15） 東京国立博物館は、湯島聖堂博覧会をもって同館の起源と公称する。

（16） なお、太陽暦に改暦された明治６年１月の太政官布告では、31日は休日としないと改められた。代わって明治６年10月の布告で、１月30日が先代天皇の崩御日として、休日に指定された。ラインの博物館観覧は１月30日であったかもしれない。

（17） C.W.Spang（2006）Anmerkungen zur frühen OAG-Geschichte bis zur Eintragung als “japanischer Verein”(1904)，*NOAG 179–180*

（18） Spang氏 は、「OAGが最初に所蔵し、1878年に“医療機関に所蔵”された“自然史標本”についても不明である。行方不明の博物学コレクションが所蔵されていた医療機関がド

イツにあったのか日本にあったのかは定かではない。コレクションの一部が日本で保管されていた可能性もある。(筆者訳)」と述べている。前掲註17

(19) 遠藤明久 (1963)「開拓使物産売捌所の用途・敷地・建築工期（第１報)」『日本建築学会論文報告集』82

(20) 広瀬健一郎 (1996)「開拓使仮学校附属北海道土人教育所と開拓使官園へのアイヌの強制就学に関する研究」『北海道大学教育学部紀要』72

(21) 前掲註20、p.13

(22) 石上 敏 (2019)「近代日本黎明期の博覧会」『大阪商業大学論集』15-1
佐野 実 (2021)「明治初期の博覧会政策にみる地方社会の多様性とその序列化」『21世紀アジア学研究』19

(23) 東京文化財研究所美術部編 (2004)『明治期府県博覧会出品目録 明治四年～九年』中央公論美術出版

(24) 畏友、黒田晃弘氏のご教示による。

【付記】本稿執筆に際して楠根重和氏には様々なご教示と激励をいただいた。記して謝意を表する。また本稿執筆の機会を与えられたWinfried Schenk氏、Tobit Nauheim氏、日本語稿掲載の機会を与えられた内川隆志氏、日記読解に関して協力された國學院大學大学院歴史地理学ゼミ参加者諸氏にも謝意を表する次第である。

(國學院大學文学部教授)